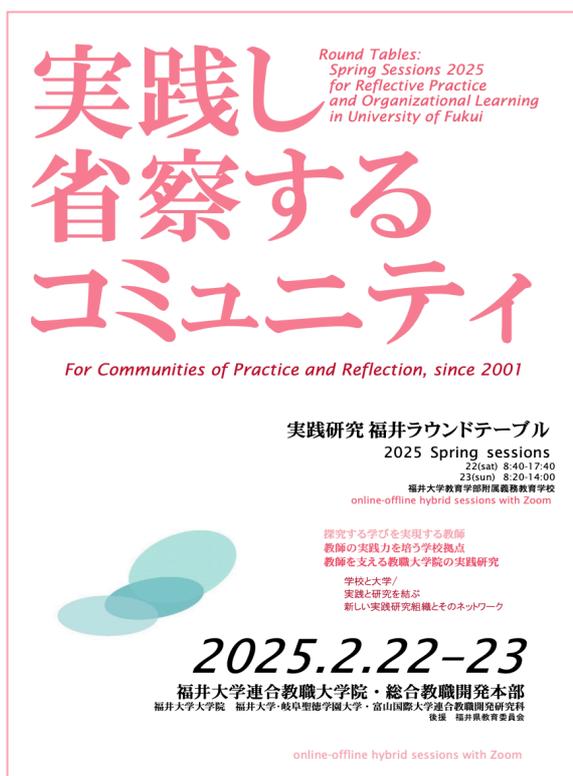


# 教職大学院 Newsletter No.191

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since 2008.4 2025.02.21

## 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2025 Hybrid (対面-Online) Spring Sessions 特集号



**実践し省察するコミュニティ**  
Round Tables: Spring Sessions 2025 for Reflective Practice and Organizational Learning in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル  
2025 Spring sessions  
22(Sat) 8:40-17:40  
23(Sun) 8:20-14:00  
福井大学教育学部附属義務教育学校  
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師  
教師の実践力を培う学校拠点  
教師を支える教職大学院の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

**2025.2.22-23**  
福井大学連合教職大学院・総合教職開発本部  
福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科  
後援：福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

**内容**

- 世界に広がるラウンドテーブル (2)
- 全体スケジュール (3)
- Keynote Session (Session I)**  
教職大学院改革特別フォーラム (4)
- Poster Session** (5)
- Zone Session (Session II)**
  - Zone A** 学校 (7)
  - Zone B** 教師教育 (8)
  - Zone C** コミュニティ (9)
  - Zone D** International (10)
  - Zone E** 探究 (11)
  - Zone F** インクルーシブ教育 (12)
- Round Table Cross Sessions (Session III)** (13)
  - 実践し省察するコミュニティを結び支える (14)
  - ラウンドテーブルの歩み (16)
  - 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革  
グローバルコミュニティへの誘い (18)
  - アーカイブ (20)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2025年2月の開催をもって48回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にてSpring Sessionsを開催いたします。

会場は福井大学教育学部附属義務教育学校での開催になります(対面参加の場合は公共交通機関でのご来場になります。なお、近隣にお住まいの方に迷惑になる路上駐車等をご遠慮くださいますようお願いいたします)。

# ラウンドテーブルを協働・共創の学びの機会に

福井大学連合教職大学院 連合教職開発研究科 准教授 宮本 雄太

全国各地より多くの皆さまにご参加いただき、誠にありがとうございます。「実践研究福井ラウンドテーブル」は、2001年3月に始まり今回で48回目を迎えることとなりました。これまでは主に大学を会場として運営してきましたが、今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions では、初めて本学教育学部附属義務教育学校で開催する運びとなりました。今回、会場を快く提供いただいた附属義務教育学校にも改めて感謝申し上げます。新たな地での開催ということで、多くの検討を重ねながら当日を迎えることになります。運営側も不慣れな部分がありご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、参加される皆様と共に心に残るものを創りたいと考えています。

さて、本学は教員養成フラッグシップ大学として、高度な教育研究のリード機能、教員養成のハブ機能、附属学園を活用した実践的な教員養成機能、教育政策に関する提言機能などが求められています。そのため、教員養成フラッグシップ大学と附属学園の関係は、より高度な教育研究と実践の緊密な連携の中で構築されることが求められます。本学では、大学と附属学園が日々の実践を共に見合い、教育の理論と実践の循環を強化しながら、多様化する社会のニーズに応える柔軟な教育のあり方を模索し続けています。今回の「実践研究福井ラウンドテーブル」の附属義務教育学校での開催は、これまでの協働・共創の学び合いやつながり合いを背景としており、風通しの良い連携の一つの成果であるとも考えられます。この二日間が誰にとっても風通しの良い交流になることを期待しています。

実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions は、大きく四つの Session にて構成されています。Session I では、7回目となる「教職大学院改革特別フォーラム」を開催します。学校・大学・教育委員会・教職員支援機構など、多様な連携の中で探究する学びの実現、それを支える教師の実践的な力量形成、広範な展開を支えるネットワークづくりという課題に取り組んできたそれぞれの実践の歩みを聴きながら、学校・行政・メディア・大学が果たす役割と協働の可能性を探ります。

Poster Session では、大人、児童・生徒がそれぞれの長い実践を報告したり、1年間という長期の探究の歩みをまとめたりしたものを発表します。お互いがより近いところで言葉を交わすことのできる貴重な機会になっています。単なる発表と質疑にとどまるのではなく、お互いの取り組みや歩みに思いを馳せながら話を語り聴き合うことを通して、深い対話がなされることを期待しています。

Session II では、学校・教育・地域のあり方について、多様な立場・経験を介して見えるそれぞれの景色をお互いの言葉で伝え合い、問い直す機会になります。今回は、前回開催を見送ったインクルーシブの zone も含めた6つの zone に分かれます。それぞれの実践報告を足掛かりにしながら、参加者同士が互いの思索を交歓することで、各 zone がテーマとする学校・教育・地域の可能性を探りたいと思います。

Session III では、生徒・学生から多様な背景を持つ大人までが小グループに分かれて互いの長い歩みを語り聴き合います。日常触れることのないメンバーと対話し思索を深めていくためには、メンバーが互いに報告の背景や試行錯誤の歩みを捉える必要があり、記録が重要な位置付けになります。記録をもとに語り聴き合うことを通して、参加者それぞれが協働的かつ深い省察の機会になることを期待しています。

「実践研究福井ラウンドテーブル」は、上記の点を大切にしながら、各地で行われている日々の実践を問い直す機会として全国の実践現場と学び合う中で、多様なコミュニティとつながり合い、支え合うネットワークを構築する場になります。これまでラウンドテーブルは全国各地で開催され、多くの出会いや学びが生まれてきました。今回も、附属義務教育学校での開催ならではの魅力を活かしながら、さらに有意義な時間を皆さまと共に創り上げていければと思います。多彩なプログラムや交流の機会をご用意しておりますので、ぜひ積極的にご参加いただき、この機会を最大限に活用していただければ幸いです。最後になりますが、本イベントが皆さまにとって実り多いものとなることを祈念しております。この二日間、どうぞよろしくお願いいたします。

全体スケジュール

実践研究  
福井ラウンドテーブル  
2025 Spring sessions  
The 25th anniversary year of Round Table  
Cross Sessions

2/22(sat) 8:40-17:40 (zoom 接続開始 8:10)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 8:40-11:00

新聞が結びひろく新たな学びへの企図 Zoom  
教育改革の広範な展開を支えるメディアの役割を探る

Poster Session I ポスターセッション 11:20-12:20-大学生・社会人-(対面/Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション 13:10-14:10 -児童・生徒-(対面/Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える6つのアプローチ 14:30-17:40

- A 学校: **子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ**-主体的な学びのプロセスを問い直す-  
対面/Zoom
- B 教師教育: **教師であることを支える教師教育**-信濃教育会と福井大学教職大学院の歩みから-  
Zoom
- C コミュニティ: **持続可能なコミュニティをコーディネートする** Zoom  
-いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性-
- D International: **International Initiatives on Collaborative Learning** Zoom  
-Teacher Education and Professional Development-
- E 探究: **学びと教えのあたらしいすがたが好みをみんなで考える** 対面/Zoom  
-誰もが「居心地」の良い学校はつくれるか？-
- F インクルーシブ: **「個」の視点から教育を再考する**-育ち合う子どもたちとコミュニティ-  
対面 (AOSSA 会場)

2/23(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。次の URL から申し込み可能です。 <https://forms.gle/a57jaRwRx2VMcL1h6>
- 2/23 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みフォームで選択ください。
- 2/23 の session III の参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願ひいたします。プログラムの変更等があり得ます。最新情報を教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

2/22 (sat)

Session I

実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions

Keynote Session 教職大学院改革特別フォーラム

2025年2月22日(土) 8:40-11:00  
オンライン (Zoom 使用)

「新たな教師の学び」を支える協働のためにVII

**新たな学びへの多様な企図を支える**

教育改革の広範な展開を支える行政・メディア・大学の役割とその協働の可能性を探る

探究する学びへの実践と展望をより広く共有するために  
行政・メディア・大学が果たす新たな役割とその協働の可能性を探ります。

転換を続けるグローバル化した社会の中、所与の知識の伝達・習得を中心とした学習から、流動状況の中で探究・省察し協働実践する力を培う学習への大きな転換が求められ、さまざまな学校・地域において、新たな学びへの挑戦が始まっています。

しかし、そうした先駆的な企図を結び、より多くの、そして大多数の人々と共有し、広範な支持のもとに実現していくための取り組みはまだ始まったばかりです。今回のフォーラムでは、新たな学びへの企図を支える福井県・福井新聞・教育新聞・福井大学の取り組みを共有しつつ、それぞれの取り組みを結び、より広い支援のための協働の可能性を探りたいと思います。

福井県では、学校における「子どもたちの主体的で協働的な学び」・「探究学習」を支え、「子どもが主役」の教育を実現するための施策を積み重ね、今後に向けてさらに発展させていくアクションプランを策定しつつあります。

福井新聞では2022年春より、福井の学校で進められている新たな学びへの多様な挑戦を追い、毎週日曜日付で見開き2面を学校教育面として掲載しています。県内の小中学校・高校・幼稚園・特別支援学校、そして大学と広範囲にわたり、学校の変革への試みや実践事例、子どもたちの学びの内容を広範な読者と共有する、開かれた学びのひろばとなっています。

教育新聞は、教育の専門紙として「教育ジャーナリズム」を掲げ、教育改革をめぐる政策や取り組み、世界の教育の動きを広く探り、教育に関わる読者と共有する役割を長年にわたって担ってきています。「教育を変えるファクトがある」「教育現場と社会つなぐ国内最大級の教育ニュースメディア」「対話と共感が生まれる瞬間」。そのメッセージには、教育改革のための開かれた共有の場を開こうとする、この新聞の姿勢が示されています。

福井大学教職大学院・総合教職開発本部は、教員養成フラッグシップ大学として、学校・教育委員会・教職員支援機構と結びつつ、探究する学びの実現とそれを支える教師の実践的な力量形成のためのカリキュラム開発を進めるとともに、その広範な展開を支えるネットワークづくりという課題に取り組んでいます。

新たな学びの多様な企図を結び支えるそれぞれの取り組みと蓄積に耳を傾けながら、今後、より広い支援のフレームを協働して創っていくための取り組み、その課題を見定めていきたいと思っています。

登壇者 (予定)

福井県教育長 藤丸 伸和

福井新聞 局長待遇 みんなの新聞推進室長 菊野 昭彦

教育新聞 編集長 小木曾 浩介

福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授 木村 優

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員免許・研修企画室長 石川 仙太郎

他

Poster Session

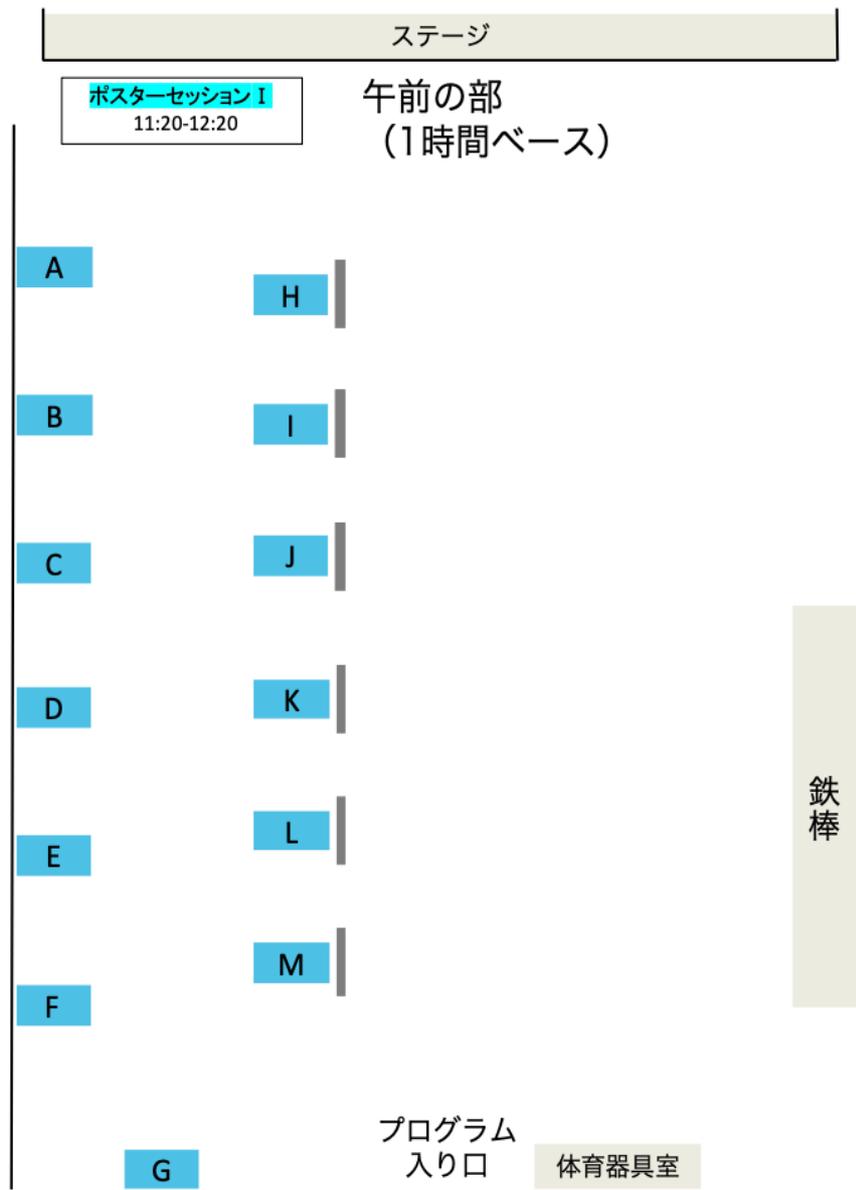
実践研究福井ラウンドテーブルSpring Sessions 2025

# Poster Session

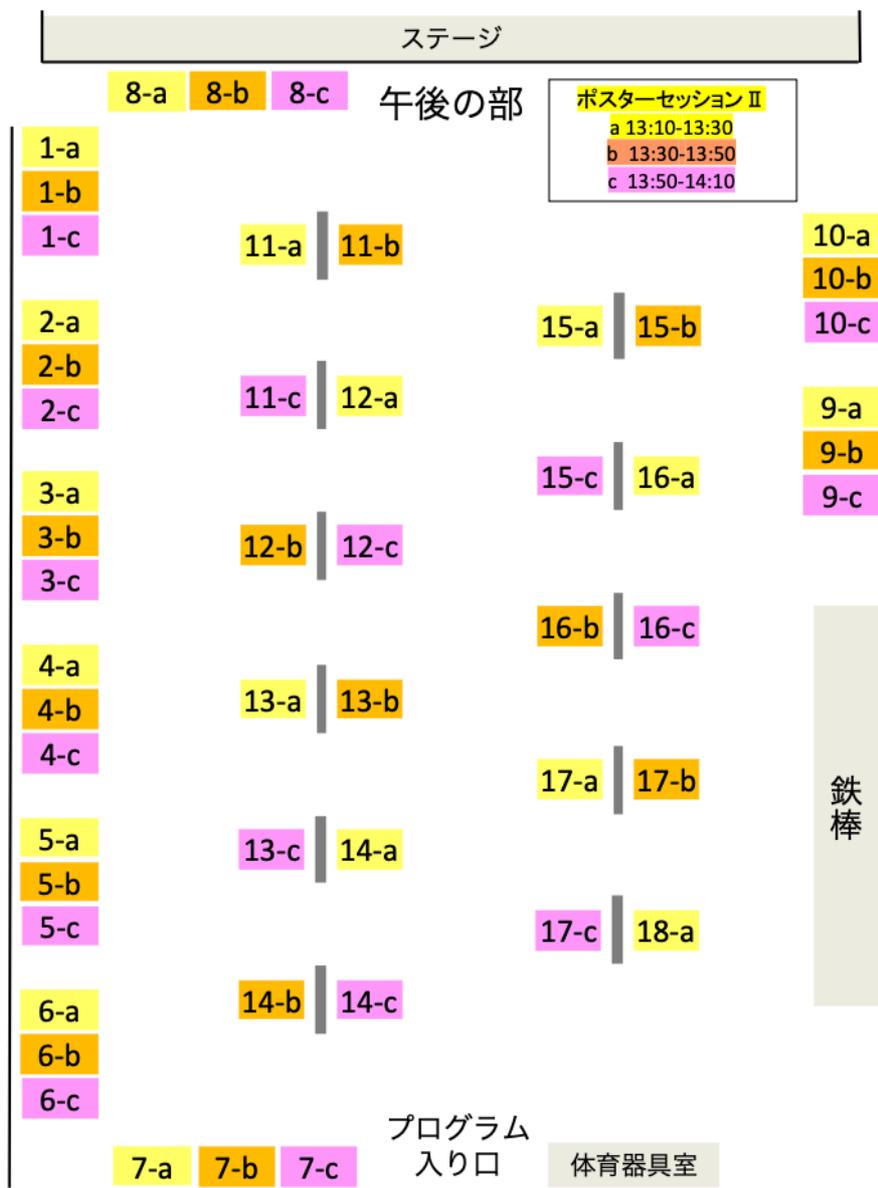
Poster Session I (11:20-12:20) - 大学生・社会人-

Poster Session II (13:10-14:10) - 児童・生徒-

ポスターセッション会場：附属小学校体育館2階



## ポスターセッション会場：附属小学校体育館2階



## 参加者の皆様へ

- ポスター発表の時間、場所、タイトル等は急遽変更になる場合がございます。ご容赦ください。
- 対面セッション、オンラインセッションいずれにおいても、事前の申し込みがなくても聴き手としてのご参加が可能です。ぜひご参加ください。
- 対面発表者の皆様：多くの皆様に見ていただけるよう、ラウンドテーブル開催期間中はポスターを掲示いたします。差し支えなければ発表終了後も掲示したままにしておいていただけますようお願いいたします。お持ち帰りされる場合には、ラウンドテーブル終了までにご自身で回収をお願いいたします。ラウンドテーブル終了後は事務局にて回収・破棄させていただきます。

## Session II

**ZoneA** テーマ：子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ

## ～主体的な学びのプロセスを問い直す～

ZoneAでは「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」をテーマとして掲げ、子どもの学びのプロセスを大切にしながら、子どもたちの遊びや生活、学習、そして大人たちが学び合っていく活動を展開していくことについて考えてきました。「主体的・対話的で深い学び」と同時に「チーム学校」「こどもまんなか社会」「co-agency」といったことが提起されてきたように、今、子どもたちが主体的に学びを深めていくために、学校や園、そして、地域で支えていくことが求められています。

前回のシンポジウムでは、保育者が子どもたちの遊びの展開を丁寧に見とりながら遊びの環境を工夫し、子どもたちと共に遊びを深めていく保育者の姿に学びました。また、中学校の教師が、子どもと共に授業研究会等で語り合う中で新たな気づきや問いにふれ、学習活動を再構成していく教師の姿に学びました。

私たちは、常に子どもに学びながら実践を変えていこうとする教師の姿勢に注目してきましたが、あらためて、「子ども主体」という時、「教師はどこに立っている」といえるのでしょうか。「教師主導」でなく、また子どもの「後追い」でもない教師の立ち位置、授業とは、どのようなものなのでしょうか。また、子どもの主体的な学習は、教科学習において、どのように実現可能なのでしょうか。評価との兼ね合いの中で、悩みながらこれらの問いに向き合っている方も多いのではないかと思います。

今回のシンポジウムでは、小学校の実践から、教師が単元当初に意図や計画を持ちながら、子どもたちの学びの様子からそれらを変容させ、子どもたちと共に授業を展開してきたプロセスを報告していただきます。また、高校の実践から、教科学習において、評価も意識しながら、どのように子ども主体の学びを実現しようとしているのか、そのプロセスを報告していただきます。「主体的な学び」のプロセスを、参加者の皆様と一緒に探っていきたいと思います。

## ☆ハイブリッド開催

|             |             |           |
|-------------|-------------|-----------|
| Connection  | 14:30-14:40 | オンライン接続   |
| Orientation | 14:40-14:50 | オリエンテーション |

## 【Session I】

Symposium 「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」  
～主体的な学びのプロセスを問いなおす～

## &lt;シンポジウム&gt;

|                         |              |    |       |
|-------------------------|--------------|----|-------|
| 14:50-15:10             | 富山県富山市立堀川小学校 | 教諭 | 大津賀悟史 |
| 15:10-15:30             | 福井県立若狭高等学校   | 教諭 | 横田和也  |
| コーディネーター：福井大学教職大学院 香山太輝 |              |    |       |

## &lt;全体&gt; 15:30-16:00

私たちは、「主体的な学び」を子どもとの相互作用を通してどのように組織していくことができるのか、話題提供をふまえて皆様と共に探っていきます。

## &lt;休憩&gt; 16:00-16:20

## 【Session II】 16:20-17:40 Cross-session

Session Iの議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

## Zone B 教師教育

### 教師であることを支える教師教育

#### ～ 信濃教育会と福井大学連合教職大学院の歩みから ～

教師の長時間労働と多忙化が世界的な社会問題となり、「well-being」への関心が高まっています。日本においては、労働環境の厳しさが浮き彫りとなり、教員志望者が減少しています。

このような厳しい状況下にある学校現場では、それぞれの地域的特性や経験を活かしつつ、「令和の日本型学校教育」を実現するという課題と、これまでの公教育の質を維持するという課題に、同時に取り組んでいます。さまざまな試みが展開する中で、合流点の一つは、学校、地域、大学、自治体をつないだ広いコミュニティの重奏の中で、「教師であること」を支えることにあります。

教師であるとはどういうことなのか。この問いに対して、1886年（明治19年）7月に設立された信濃教育会は、長い年月の中でふるいにかけて、磨きあげられてきた教師たちの経験や実践を土台とした独自の教師像を示し続けています。

Zone B「教師教育」では、信濃教育会との対話を通じて、教師であることを支える自律的かつ専門的な教師教育のあり方について問い直してみたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

【会場】 福井大学教育学部附属義務教育学校・プロジェクトルーム棟（ゆずりは）より中継

#### 【登壇者】

大日方 貞一 氏（公益社団法人 信濃教育会・会長）  
松木 健一 氏（福井大学・理事/副学長）  
西村 拓生 氏（立命館大学文学部・教授）

14:00-14:30 オンライン接続

14:30-14:35 趣旨説明 鮫島京一（福井大学教職大学院・教授）

14:35-15:05 報告1 大日方貞一氏 「信濃教育会における教師教育——信州の教師となるとは？」

15:05-15:35 報告2 松木健一氏 「連合教職大学院における教師教育——二つのパラダイムを超えて」

15:35-15:40 休憩

15:40-16:10 Session1 二つの報告をめぐるグループ対話

16:10-16:25 Session1 をめぐるグループ対話の共有および登壇者への質問

16:25-16:30 休憩

16:30-16:50 Session2 参加者から出されたことをめぐる対話 西村拓生氏（司会）・大日方貞一氏・松木健一氏

16:50-17:25 Session2 における対話を各自が置かれている文脈と照らし合わせながらのグループ対話

17:25-17:40 ふりかえりと展望

## ZoneC コミュニティ

### 持続可能なコミュニティをコーディネートする いつもの居場所を離れてみることから開ける可能性

私たちが学び成長する時、多くの場合、自分とは違う個性を持った他者との出会いがあります。これは ZoneC の歩みの中で繰り返し発見されてきたことです。若者や移住者が地域住民と出会う時、小学生が地域の伝統に触れる時、地元の経営者が中学生と対話する時、そこにはいつもお互いに学び成長する場が生まれていました。このような出会いは、いつもの自分の居場所から離れる時に生まれるように見えます。今回の ZoneC では、私たちがいつものコミュニティを離れて、一時的に違うコミュニティに参加することで開ける豊かな可能性について考えていきます。

スポットを当てるのは、「足羽川ふれあいマラソン」という地域社会で長く親しまれているイベントです。この大会は社会福祉法人足羽福祉会によって主催されており、その運営は多くのボランティアによって支えられています。ボランティアには地元住民だけでなく、小学生も中学生も高校生も大学生も PTA も会社員も行政職員も障がいのある人もない人も、多様な人が集い、思いを共有し、協力しあって、ふれあいとおもてなしに満ちた大会を実現しています。広くわかち合われた大会への思いは、スタッフの皆さんの明るい挨拶、沿道の声援や吹奏楽部の演奏、ゴール後の美味しいぜんざい、荷物預け所のスムーズな運営など、随所に感じられます。

注目したいのは、いつもの日常を離れて集った多様な人たちが、どのようにして見事な成果を生み出すようになったのか、その過程で個人とコミュニティにどんな変化が生まれてきたのか、という点です。なぜなら、ここでは誰もがいつもの日常を離れており、だからこそ生まれてくる互いの支えあいや活かしあいがあり、それが成果につながっているように見えるからです。いつもの慣れた学校や職場や近所というつながりを離れて、未知の人たちと協力して何かを成し遂げようとする時、私たちの内面との間で何が生まれるのでしょうか。それはいつもの居場所に戻った時、どんな変化を生むのでしょうか。

いつもと違うコミュニティに参加し、いつもと違う人たちと協働する時に生まれる可能性を考えることは、現在あらゆるコミュニティが抱えている持続の困難さ、あるいはマンネリ化に対する新しい視界を開いてくれると考えています。私たちはいつもと違うコミュニティでいつもと違う学びを得て、それがいつものコミュニティに環流する時、人の成長とコミュニティの進化が好循環を始めるのではないかと。そんな可能性に向けた対話の時を紡ぎ出せればと思います。それは多様な背景を持つ私たちが集う ZoneC が持つ可能性の再発見にもつながるはずです。

14:30～14:40 趣旨説明 富永 良史

14:40～15:00 実践報告

『「足羽川ふれあいマラソン×ボランティア×コミュニティ」の可能性について考える』

高村 昌裕さん（社会福祉法人 足羽福祉会）

15:00～15:20 大会運営を支えるボランティアのみなさんとの対談

コーディネーター：清川 卓二

15:20～16:00 小グループでの話し合い

16:00～16:15 休憩（チャットタイム）

16:15～16:45 全体共有

16:45～17:15 小グループでの話し合い

17:15～17:40 全体共有と全体セッション～ふり返りと展望～

全体ファシリテーター：富永 良史

## Zone D International

Saturday, February 22nd 15:00 – 17:20 (Japan Time)

# International Initiatives on Collaborative Learning Teacher Education and Professional Development



Hosted by The University Of Fukui, Japan

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

The University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who are engaged in teacher education through collaborative learning and has been maintaining its ties with the past foreign students by inviting them to the Roundtable to share their previous and current practices with practitioners from different countries. Moreover, since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and "Roundtable." In the symposium, the symposiasts will discuss the proposed approaches, results, and challenges in their contexts. In the "Roundtable," educators from various countries will share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。福井大学教職大学院では、世界各国からの留学生を受け入れています。福井ラウンドテーブルでは、探究型学習を通じた教師教育を受けた留学生が帰国後の授業実践の報告も行っています。加えて、2021年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校と協働・連携し、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、世界各国の様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone においてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。なお、本セッションは英語での議論となりますが、**日-英の通訳を行います**ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを**別途**ご用意ください。



### Lesson Study Network in Nalikule College of Education and Malikha Community Day Secondary School, Malawi

< Symposiast >

Jeremiah Kampazangula Phiri  
Lecturer,  
Nalikule College of Education, Malawi

< Symposiast >

Joseph Eliyas Mbale  
Teacher, Malikha Community Day  
Secondary School, Malawi



[ Session I ] 15:00-15:40 Symposium

<Moderator> William Tjipto, University of Fukui <Commenter> NUMAJIRI, Takuya, University of Fukui

[ Session II ] 16:00-17:00 Roundtable

Sharing and learning from each other's practices in small groups. We are welcoming the following guest speakers to present their experiences:

|   |  |  |
|---|--|--|
| Doaa Hashem (Egypt)<br>Egypt-Japan School Obour                   | Mala Manurung (Indonesia)<br>Gloria Christian ES 1, Surabaya                     | Alwalaa Noman (Egypt)<br>Egypt-Japan School Suez           |
| Kandy Perez (Guatemala)<br>Don Bosco Salesian School of Guatemala | Jose Luis Contreras Silva (Mexico)<br>Technical SS #161, School Zone 01, Morelia | Shana Wolff (USA)<br>Fukui University of Technology, Japan |

[ Closing ] 17:10-17:20 HASHIMOTO, Hisayo, University of Fukui (TBD)



[ Register Online at the QR Code or URL ]  
<https://forms.gle/9hf2K11cngsYTBEC8>  
(Registration closes on Monday, February 17<sup>th</sup>)

[The United Professional Graduate School of Professional Development of Teachers, University of Fukui ]

<https://www.fu-edu.net/en/>

[ Contact ] William Tjipto, [wtjpto@u-fukui.ac.jp](mailto:wjtjpto@u-fukui.ac.jp)

ZONE E 探究

実践研究福井ラウンドテーブル2025春

2025.2.22 SAT 11:20-17:40  
学びと教えのあたらしいすがたカタチを  
みんなで考える

対面会場 福井大学教育学部附属義務教育学校  
<https://maps.app.goo.gl/U1L6BLmSunWenN896>

オンライン Zoom

参加申込 本フライヤー二次元バーコードから  
参加・発表申込フォームに  
お進みください

スケジュール

- 11:20-12:20 ポスターセッションⅠ（主に大学生・社会人）  
13:10-14:10 ポスターセッションⅡ（主に児童・生徒）  
※ご発表いただいた方には、福井大学大学院発行の  
「発表証明書」を贈呈いたします。
- 14:30-17:40 ワークショップ

誰もが「居心地」の良い学校はつくれるか？

参加申込



<https://forms.gle/a57jaRwRx2VMcL1h6>

ポスターセッション発表申込



<https://forms.gle/v5rDvkNAvcvBcvLRA>

ZONE E  
探究

ZoneF インクルーシブ

〈対面開催〉

「個」の視点から教育を再考する  
 —育ち合う子どもたちとコミュニティ—

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どものあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions において「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。そして、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions 以降は、『ZoneA 学校』とのコラボレーションによって、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

多くの子ども達が共に学ぶ学校の中で、一人ひとりの子どもの思いを深く共有するのは容易なことではありません。しかし、一人ひとりの子どもに寄り添うためには、そして子どもの視点から学校や社会の当たり前を問い直すためには、一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つことが不可欠です。そこで、前回の実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions では、ZoneF として「『個』の視点から教育を再考する—子どもと教師の接面を探る—」というテーマを掲げ、シンポジウム・フォーラムを開催しました。シンポジウムでは2名の方に話題提供をお願いし、それぞれの場で生きる個別具体的な子どもの姿を共有することを通じて、子どもの視点から学校や教育のあり方を探ってきました。いずれの話題提供においても、子どもが自己を位置づけることのできるコミュニティの存在の重要性が示され、個に寄り添うことと、個とコミュニティとの関係を編むことの両輪から教育のあり方を考える必要性が浮かび上がってきました。

しかし、個に寄り添うことと集団へのアプローチは時として両立困難な事態として私たちの前に立ち現われます。そこで今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions では、個別具体的な事例の共有を通じて、個に寄り添うことと子どもが生きるコミュニティとの関係を編むことを問い直し、個とコミュニティの相互の育ちが実現するようなインクルーシブ時代の教育のあり方について参加者のみなさまと共に探究していきたいと思いをします。

日時：2月22日（土）13：30-17：00

会場：AOSSA（福井県福井市手寄1丁目4-1）福井市地域交流プラザ 6F 研修室

13:30-13:40 〈Session 0〉オリエンテーション

13:50-15:15 〈Session I〉シンポジウム

|          |                  |    |         |
|----------|------------------|----|---------|
| 話題提供     | 豊中市立南桜塚小学校       | 教諭 | 中田 崇彦 氏 |
| 話題提供     | 福井大学教育学部附属特別支援学校 | 教諭 | 岩佐 成樹 氏 |
| コーディネーター | 福井大学連合教職大学院      |    | 廣澤 愛子   |

15:35-16:55 〈Session II〉クロスセッション

話題提供を踏まえ、小グループ形式で語り合います。個に寄り添うことと子どもが生きるコミュニティとの関係を編むことの両輪から、それぞれの実践者が直面している課題や取り組みの中で見えてきたことを捉え直し、明日への展望をひらいていきたいと思いをします。

## Round Table Cross Sessions

## 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

| 【対面/オンライン】                  |             | 【はじめに】  |
|-----------------------------|-------------|---|
| ①はじめに                       | 8:20-8:40   | <p>ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。</p> <p>それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。</p> <p><b>【報告】</b></p> <p>グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。</p> <p>報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。</p> |
| ②自己紹介                       | 8:40-9:00   |   |
| ③報告Ⅰ                        | 9:00-10:40  |   |
| ④報告Ⅱ                        | 10:40-11:40 |   |
| ⑤報告Ⅲ                        | 12:20-14:00 |   |
| * オンライン参加の方は、8:20 までに接続願います |             |   |

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聞き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたと思います。

## ラウンドテーブル

### 実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

#### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフストーリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

#### 実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実は動かしがたい。そうし

た暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

### 小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

### パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31)

### ラウンドテーブルの 4 重の意味

#### 4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。  
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。  
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice  
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。  
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ  
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning  
Communities for Reflective Practitioners

## 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2025.2

|               |   |
|---------------|---|
| 2001.3.17-18  | 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして<br>木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)   |
| 2001.11.10-11 | 実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働(第1回)<br>For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される(参加者20数名)。京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク |
| 2002.3.16-17  | 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志<br>フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ~現在に至る   |
| 2002.7.13-14  | 実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む)(第3回)  |
| 2003.3.15-16  | 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第4回)<br>シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明   |
| 2003.7.12-13  | 実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第5回)  |
| 2004.3.13-14  | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第6回) 秋田喜代美ほか   |
| 2004.7.3-4    | 実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル2004(第7回)<br>2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海~2009)<br>2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)~現在に至る  |
| 2005.3.5-6    | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005(第8回 参加者100名超)<br>国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館  |
| 2005.7.9-10   | 実践研究福井ラウンドテーブル2005(第9回)   |
| 2006.3.4-5    | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・ブラザ(第10回)<br>田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭   |
| 2006.7.1-2    | 実践研究福井ラウンドテーブル2006(第11回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫<br>兼日本社会教育学会東海北陸研究集会  |
| 2007.3.3-4    | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007(第12回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹<br>2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる  |
| 2007.6.30-7.1 | 実践研究福井ラウンドテーブル2007(第13回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男   |
| 2008.3.1-2    | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008(第14回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu  |
| 2008.6.28-29  | 実践研究福井ラウンドテーブル2008(第15回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆  |
| 2009.2.28-3.1 | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009(第16回)稲垣忠彦  |
| 2009.6.27-28  | 実践研究福井ラウンドテーブル2009(第17回)5つの領域:専門職として学び合うコミュニティ<br>(分野ごとのセッション始まる)   |
| 2010.2.27-28  | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010(第18回参加者300名前後)鈴木寛 Catherine Lewis  |
| 2010.6.26-27  | 実践研究福井ラウンドテーブル2010(第19回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護  |
| 2011.2.26-27  | 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011(第20回 参加者300名を超える)門脇厚司・森透   |
| 2011.6.25-26  | 実践研究福井ラウンドテーブル2011(第21回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二  |
| 2012.3.3-4    | 実践研究福井ラウンドテーブル2012 Spring Sessions(第22回)(名称を変更する)   |
| 2012.6.23-24  | 実践研究福井ラウンドテーブル2012 Summer Sessions(第23回) 参加者450名を越える<br>兼日本社会教育学会東海北陸研究集会   |

|               |  |
|---------------|--|
| 2013.3.2-3    | 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 Spring Sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催  |
| 2013.6.29-30  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 Summer Sessions(第 25 回)<br>11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 Winter Sessions(明治大学)<br>2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)   |
| 2014.3.1-2    | 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 Spring Sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える  |
| 2014.6.21-22  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 Summer Sessions(第 27 回)<br>11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)<br>11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)<br>2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル  |
| 2015.2.27-3.1 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 Spring Sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える   |
| 2015.6.26-28  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 Summer Sessions(第 29 回)<br>11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)<br>11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)<br>12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、<br>2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015                                  |
| 2016.2.26-28  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Spring Sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える<br>生徒ポスターセッションを開催   |
| 2016.6.24-26  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Summer Sessions(第 31 回)参加者総数 547 名<br>7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)<br>11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)<br>11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)<br>2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015<br>2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム |
| 2017.2.17-19  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える<br>特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足   |
| 2017.6.23-25  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Summer Sessions(第 33 回)参加者総数 566 名<br>10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル<br>11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学<br>12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)   |
| 2018.2.22-24  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Spring Sessions(第 34 回)参加者総数 627 名   |
| 2018.6.22-24  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions(第 35 回)参加者総数 476 名<br>10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル<br>11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良<br>12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学<br>12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学)<br>2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム                  |
| 2019.2.15-17  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Spring Sessions(第 36 回)参加者総数 930 名   |
| 2019.6.21-23  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 Summer Sessions(第 37 回)参加者総数 426 名<br>9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、<br>11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、<br>12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)<br>2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム   |
| 2020.2.15-16  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Spring Sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度<br>3.3-4 ウガンダラウンドテーブル   |
| 2020.6.20-21  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Summer Sessions(第 39 回)参加者総数 500 名程度<br>11.21 東京サテライト・ラウンドテーブル<br>11.21 関西ラウンドテーブル   |
| 2021.2.20-21  | 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions(第 40 回)参加者総数 550 名程度   |

|              |   |
|--------------|---|
| 2021.6.20-21 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions(第 41 回)参加者総数 560 名程度<br>11.13 東京サテライト・ラウンドテーブル<br>11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021   |
| 2022.2.20-21 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2022 Spring Sessions(第 42 回)参加者総数 660 名程度  |
| 2022.6.18-19 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2022 Summer Sessions(第 43 回)参加者総数 640 名程度<br>8.4 宮古島ラウンドテーブル<br>11.26 東京ラウンドテーブル   |
| 2023.2.18-19 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions(第 44 回)参加者総数 660 名程度  |
| 2023.6.17-18 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2023 Summer Sessions(第 45 回)参加者総数 560 名程度<br>8.25 岐阜ラウンドテーブル<br>10.28 信州ラウンドテーブル 2023(信州大学教育学部附属長野三校研究会)<br>11.18 東京サテライト・ラウンドテーブル 2023<br>11.18-19 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 奈良ラウンドテーブル<br>2024.1.27 岐阜ラウンドテーブル |
| 2024.2.17-18 | 実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions(第 46 回)参加者総数 980 名程度  |
| 2024.7.6-7   | 実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions(第 47 回)参加者総数 485 名程度<br>10.20 静岡ラウンドテーブル<br>11.16 東京サテライト・ラウンドテーブル 2024<br>2025.1.25 岐阜ラウンドテーブル   |

## 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い らうんどうていぶるのひろがりとおほまりをとおして

福井大学連合教職大学院教授 木村 優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ<sup>1</sup>を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは回数を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていっています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑

戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA<sup>2</sup> ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構<sup>3</sup>としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ(革新的)なローカル・コミュニティが集まる大きなコミュニティの「坩堝(るつぼ)」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなり、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション(解)」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可

能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた(ピア)を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただくと幸いに思います。

<sup>1</sup> あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと(ウェンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002)。

<sup>2</sup> 現代社会の特徴を表す4つの言葉: Volatility (不安定)、Uncertainty (不確実)、Complexity (複雑)、Ambiguity (曖昧)の頭文字をとった造語。

<sup>3</sup> コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織=機構のこと(ショーン, 2017)。

# Archive

— アーカイブ —

実践研究福井ラウンドテーブルに参加していただいた方の報告をご紹介します。今回紹介をさせていただくものは、Newsletter No.174 (2023.08.23 発刊 ラウンドテーブル 2023 Summer Sessions の感想) と Newsletter No. 180 (2024.03.23 発刊 ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions) に掲載されたものです。※ご所属は当時のものです。

[Newsletter No.174 \(2023.08.23\) より](#)

## 「学びの連続性」が子どもたちの未来をひらく

株式会社ベネッセコーポレーション北陸支社 相武 貴志

この度、初めて「実践研究福井ラウンドテーブル」に参加させていただきました。福井県は初等・中等教育、高等教育が連携し、地域の教育課題に向き合い協力して実践されているイメージを持っていましたが、まさにそれを象徴する会でした。県外からも多くの先生方や企業の方が参加され、それぞれのお立場から幅広い視点で意見を交わされていました。私は Zone B に参加しましたが、福井県教育庁義務教育課の三崎光昭課長より教師の授業力向上に向けた取り組みやその成果について、特に小中学校のタブレット端末活用モデル事業や英語教育推進事業、不登校対策等に関する情報提供がございました。文科省の「英語教育実施状況調査」では全国 1 位の英語力を誇る福井県ですが、背景にある ALT の活用や小中学校の接続を意識した英語教育の実践、結果として「話す」「書く」などの表現力が高いことなど、大変興味深いお話をいただきました。

実践事例報告では、福井県立丸岡高等学校の山内康司校長先生より「魅力ある学校づくり」について新設の「みらい共創コース」、「スポーツ探究コース」の取り組みや成果を共有いただきました。先生方の学びの機会や働き方改革に直結する「教育 DX の推進」についても共有いただきましたが、探究活動の成果をアンケート分析から“見える化”している点が参考になりました。

福井市森田中学校の木下慶之先生の実践事例報告では「森田未来プロジェクト」の 4 年 3 か月の取り

組みについて、プロジェクトの進化とともに生徒の成長過程を共有いただきました。日本のどの地域・学校にも学びの機会があり、「学びたい」という意欲を持った子どもたちがいる。だからこそ、地域の方々や企業とのつながりを重視し、生徒が自分の良さや強みに気付く機会を提供していきたい、というお話が印象的でした。

実践事例報告に続き、チーム別のクロスセッションが行われました。業種や立場などを超え、教育はじめ人材育成や組織マネジメントに関する意見交換を行いました。こうした機会が設定されているのも、「実践研究福井ラウンドテーブル」の価値だと実感しました。

今回初めて参加させていただき感じたことは、教育課程や授業、そして園児・児童・生徒・学生の「学び」が変わる中で「学びの連続性」をいかに実現するか、ということです。幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校、中学校と高校、高校と大学、それぞれの学びの GAP 解消が問われています。解決方法としては、「クロスセッション」がキーワードになると考えます。例えば小中学校の先生方の交流や研究会などを通して、「学びの連続性」を実現する新たな取り組みや工夫が生まれることを期待しています。また、弊社としても他県の実践事例や調査・アセスメントデータ、人のネットワーク等を通じて各地域での活動を支援していきたいと考えています。

# ラウンドテーブルの学びとその活用

同志社中学校 生徒 遠藤 千大

今回のラウンドテーブルは私にとって3回目の経験でした。毎回様々な分野で活躍されている方々のお話を聞くことができ、とても刺激的に感じています。私が初めてラウンドテーブルに参加した時に感じたことは、「同じ中学生が同じことをテーマに考えても、視点が全く違うのだな」ということでした。そこから、自分が何かを企画する時に第三者の視点で見ってもらうことの大切さを感じました。

さて、私はいつも ZoneC で「コミュニティ」をテーマにお話を聞いています。私自身、地域コミュニティの繋がりの大切さを身をもって感じるがあります。それは、京都を走る叡山電鉄と私の通う同志社中学校が産学協同で行っている「八幡前駅プロジェクト」に参加しているからです。このプロジェクトでは、地域の人々と協力して「八幡前駅で地域交流を産む、持続可能な駅にする」というコンセプトで活動をしています。地域の人たちと活動することは、ラウンドテーブルで学んだ多くのアイデアや考え方を実践的に活かすことができる場だなと感じます。そして八幡前駅プロジェクトのミーティングでは、ラウンドテーブルで聞いたお話を思い出しながら意見を述

べるなど、学びの実践に向けた行動ができています。やはり、学ぶだけでなく実践していくことも大切だなと思っています。

そして私がラウンドテーブルでとてもいいなと思うことは、スピーカーの方が途中で挫折した時の話や失敗談などの実体験を聞くことができることです。過去の経験に基づくお話は現実的で解像度も高いです。ゴールが明確でも、その過程には予想外のことが起きます。しかし、それらを過去に乗り越えてきた方々のお話を聞くことで大切な学びを得られると思います。過去に努力して成し遂げた方法を聞くことは、自分のこれからの活動にも活かすことができるだろうと思います。ラウンドテーブルで聞いてきたお話は、私にとって大切にしたいものです。

私はラウンドテーブルのお話がこれからの自分の活動にもどこかで必ず役立つだろうと思います。コミュニティで活動することの重要性や人とのつながりを深く理解することは、地域社会に貢献する活動を進めていく上で重要です。これからもラウンドテーブルでの経験を大切に、自分の将来の活動をよりよいものにしたいと思います。

## 出会いのなかで得た多くの学び

札幌新陽高等学校 田渕 久倫

今回参加した実践研究福井ラウンドテーブル 2023SummerSessions は、まさにテーマのとおり、高い志のもと「実践」し、次なる進化を求め「省察」する人たちが集っていた。同僚からの誘いに右も左もわからず飛び込んだが、想像を遥かに超えた出会いがあり、そのなかで多くの学びを得ることができた。

私が大切にしている言葉に「もっと失敗しろ、もっと恥をかけ、もっと一流に触れろ」というものがある。今回出会った同志たちと比較すると、まだまだ恥も失敗も足りないかもしれないが、私自身も初任から絶えず実践は重ねてきたし、そのたびに多くのことを経験してきた。挫折の経験も数えきれず、その度に仲間たちに支えられ、立ち上がって進んできた。

ただ、一流に触れるということは、年を重ねるごとに、重要性の認識が増してきた気がする。実践という言葉だけに焦点を当てれば、自身の職場や所属するコミュニティの中で積み重ねることも可能である。しかし、物事には際限のない高みがあり、それらを目指すには、多くの一流と出会い、その経験に触れる機会が必要である。それは職場と家の往復だけでは絶対に得ることができないものだと考えている。だからこそ、今回のような機会は貴重であり、そのなかで得た出会いは私に多くの学びを与えてくれた。

今回の出会った人たちは、大小や種類の違いはあれど、多くの実践と省察を繰り返してきた人たちだった。それゆえ様々な課題に直面し、失敗や挫折を経

験してきたのだ。そして、そこで放棄や断念という選択をせず、それを転換点とし、多くの成長を遂げてきた人たちなのだろうと、対話の中でその背景を垣間みることができた。自らの所属やコミュニティを飛び出し、このような一流の実践者たちと出会い、対話をするには、省察に継続性や深みを与え、新たな実践を生み出したり、その実践を次の段階へと昇華させたりすることにつながる。今回もその出会いや学びを得て、自らの所属先に戻ったとき、現状に満足せずに実践をさらに更新し、省察にもっと深みを出す必要があると考えさせられた。この思いを持ち帰ることができたということだけで、このラウンドテーブルがなにもものにも変え難い貴重な場所だということがわかる。

出会いの重要性を教えてくれたのは、大人たちだけではない。このラウンドテーブルでは、小・中・高

校生もたくさん参加しており、そんな若者たちとの対話の場では、彼ら/彼女らが心の叫びをぶつけてくれた。それらを直に受け取ったとき、「立ち止まっている場合じゃない」と胸が熱くなった。

実践や省察を繰り返している人たちは、日々多忙であり、学びを得るためとはいえ、所属先以外の場所に足を運ぶことは容易ではない。しかし、今回集った実践者たちは、学びに貪欲であり、多忙の合間を縫ってこのラウンドテーブルに参加することの意義を理解している。私も今回だけで、この場所に時間や労力を投資してでも参加する価値があることに気付かされた。この事実を一人でも多くの人たちに知ってもらい、それによりさらに多くの実践者と出会えることを願っている。

Newsletter No.180 (2024.03.23) より

## 「子ども主体」の学びとは

独立行政法人教職員支援機構 長谷川 哲也

今回私が参加した ZONE A は、「子ども主体の学びを実践するコミュニティ」をテーマに、「チーム学校」としてのコミュニティの在り方を考える内容であった。私が所属する教職員支援機構では、教職員の「新たな学び」の実現に向けた取組を行っており、その根底には「子どもを主語」にした学びの実現がある。そうした学びの在り方を考える上で、「そもそも『子ども主体の学び』とはどういうことなのだろうか」ということを考えたいと思っていたため、少しでもそのヒントが得られればと思い、この ZONE に参加した。

始めに、越前市立認定こども園服間の玉村美幸園長先生にご報告いただいた。この園では「合同保育」を行っており、未満児（1、2歳）と以上児（3～5歳）にクラスを分け、それぞれのクラスは異年齢の園児たちが一緒に活動を行っているとのことだった。異年齢で保育を行うことにはメリットとデメリットがあり、年下の子が年上の子に憧れて様々なことにチャレンジしやすい反面、年上の子が年下の子のお手伝いをし過ぎてしまうことで、各年齢で身に付けてほしい力が身に付かない可能性があるとのことだった。これを聞いて、「自立」について考えさせられた。確かに年下の子が自立できないことは問題だが、年

上の子に「年下の子の自立を促す視点」を持たせようとすることも重要で、むしろそうした営みを通じて、双方の社会性が育まれるとも感じた。

次に、信州大学教育学部附属松本中学校の湯本哲先生に、学級総合（総合的な学習の時間）の取組についてご報告いただいた。生徒たちの希望を尊重した結果、テーマが細分化して学級がバラバラになってしまったため、一ヶ月半の話し合いを経て「井戸」という一つのテーマに絞ったこと、そうした話し合いを経たことで、学級が一つの目標に向かって、仲間、地域、行政などとも関わり合いながら活動ができたことなどをお話いただいた。この報告を聞いて、「子ども主体」の意味や教師の役割について改めて考えさせられた。生徒がやりたいことをやらせるだけでは深まらない学びもあり、そこに先生が生徒たちに抱く「こうなってほしい」という願いを実現するための働きかけがあることで、学びが深まっていく場合もあるのだと感じた。

発表の後は、小グループに分かれて対話を行った。年齢や立場もバラバラなメンバーで、それぞれの視点から様々な意見が聞けて面白かった。それでも課題意識は皆共通で、対話の内容はやはり「子ども主体

とは?」「教師の役割とは?」といった話となっていた。そこでは教師の役割について、『気づき』を促すこと』『みんなで協力したい』という子どもたちの想いを形にすること』『学び方』を学ばせること』といった意見が出た。どれも本質に迫る考え方だと思いい、大変興味深かった。

まだモヤモヤしている部分もあるが、このモヤモヤを大事にしながら、今回得た学びを踏まえ、これからも「子ども主体の学び」について考え続けていきたい。

## Lesson study practice at M. H. Greeff Primary School in Windhoek, Namibia: Fukui University Round Table Experiences

English Teacher at M. H. Greeff Primary School **Uzuvira Tjomita**

### Lesson Study in Namibia

Lesson study practice in Namibia is a practice which educators in schools are not very familiar with. According to “Lesson Study” N.D lesson study (or *jugyō kenkyū*) is a teaching improvement process that has origins in Japanese elementary education, where it is a widespread professional development practice. The practice involves enhancing teachers’ skills through observing each other’s classes during lessons. This is done by analysing the lesson plans and outcomes. After the observation, they discuss the effects and issues of the lesson. Thus, in turn, they improve their lessons and build productive relationships with each other. As an English Second Language teacher teaching 5th grader who have gained meaningful insight into lesson study during my time at Fukui University in Japan, it has been a challenge implementing lesson study.

With this said I was honoured with the support of my school headmaster to start small during implementation of lesson study. The implementation was a success. With up to 2-3 teachers per session, With the sessions, my observation included:

- As a department head it was less challenging. to have lesson study practice as teachers were obligated to practice and have the full cycle.
- Teachers would share teaching practices that would improve the learning in the classroom

environment and the lesson study cycle was effective.

- The observation results would enable the supervisor to analyze the teacher’s classroom reflection forms, incorporate them within lesson study, and use them as a strategy in lesson planning and delivery. To improve on policy practice, especially the COI Form (Classroom Observation Instrument for Teachers)
- In addition, as a classroom teacher teaching English second language to fifth-grade students as a teacher it is more challenging to practice lesson study as your manager in the department is less aware of lesson study as a teacher professional development strategy.
- Finishing the full cycle is a challenge. Due to time constraints. Reteaching a lesson is difficult as we must follow a term plan which is linked to the scheme of work directed by the Ministry of Education.

After participating as an observer in the previous Roundtable discussions, I presented at the Spring session in 2024. The presentation was about my experiences implementing lesson study at my school. The presentation included a brief background on the school and the challenges of implementing lesson study. One of the challenges included being able to finish the full lesson study cycle as a supervisor/head of department compared to being a teacher. One of

the takeaways of the roundtable was a video presentation which was presented to all the members of the roundtable. The video was a lesson about a weather report which I presented to fifth-grade learners. The video lesson had components of lesson study also included such as post lesson discussions.

The roundtable provided good exposure and opportunity for me as a presenter. I saw an opportunity to learn from my neighbouring counterparts how they perceive lesson study for those who were already exposed to it and how the new members who would start learning

about lesson study performs under the circumstances. In addition, the Japanese teachers who were part of the roundtable and facilitators provided valuable guidance on how to approach challenges and strategies to reach the levels of my learners and provide a conducive learning environment. In addition, I posed questions as to how I get my students to collaborate more, as this is one of the challenges that I face in the everyday classroom. The feedback I received has now provided me with more motivation to approach teaching and learning with new strategies every day.

## 一人一人の世界を「つなげる」教師の関わり

高知県教育センター 坂本 恵

初めて実践研究福井ラウンドテーブルに参加させていただいた。2日間を通して感じたことは、「つなげる」ことの大切さである。Zone F インクルーシブ『『個』の視点から教育を再考するー子どもと教師の接面を探るー』では、子どもの世界をより深く知ろうとする取組として、二つの話題提供があった。

福井県立嶺北特別支援学校の桑島教諭からは、子どもと教師のそれぞれの視点から、病弱教育における教師の関わりについて共有いただいた。気持ちを共有できる患者同士のつながり、クラスの一員であることが意識できる前籍校とのつながり等、友だちとつなげ、結ぶという、大切な役割が教師にはある。このつながりが、病弱教育におけるインクルーシブであり、他者とつなげる教師の関わりが、入院中の児童生徒の他者に向かう力を育てることにつながっていくと強く感じた。

福井大学教育学部附属幼稚園の上田教諭からは、子どもの特性に寄り添いながら、子ども同士の関わりを積み重ねていった実践について共有いただいた。「特性はその子のよさでもあり、自分なりのこだわりを大切にしながら、集団の中で自分を解きほぐしていくことができるように」という上田教諭のお話が印象的であった。こだわりを大切に、そのこだわりを友だちとつなげるきっかけにする、そしてモデルステップで自信を積み重ねていく取組は、集団

の中でその子の存在を認め尊重していく、多様性の理解につながる取組であると感じた。

話題提供後のクロスセッションでは、少人数のグループで、インクルーシブをどう捉えるか、それぞれの思いや実践を共有した。様々な立場のメンバーであったが、みんなが幸せに過ごせるように、という共通認識のもと、共に考えを深めることができた。何に向かって対話するのが明確であったため、必然性のある対話ができ、そのことが更に対話の深まりを生み出していったように感じる。対話を通して自分自身の考えを整理することができ、また、新たな気づきを得ることができた。何よりも、語りやすい、心理的安全性が保たれた環境が大切であることを実感できたことは、貴重な体験であった。

インクルーシブな社会の実現には、多様性を理解し、一人一人を尊重できる子どもたちを幼児期から育てていくことが必要である。また、多様性を理解し尊重するためには、自分のよさや可能性を認識することが必要不可欠である。子ども一人一人のよさを生かしながら、安心して共に学ぶことができる環境をみんなで作っていく、そのためには、一人一人の子どもの世界にアプローチし、子どもたちが自分のよさや可能性を認識できるように教師が関わっていくこと、そして多様な子どもたちをつないでいくことが重要であると気付くことができた時間であった。

多くの気づきや出会いにつなげていただいたこの  
機会に感謝したい。

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。  
ご自身の実践や近況、提言や意見を投稿してみませんか。  
修了生や関係機関の方の投稿也大歓迎です。  
関心がある方は、編集担当(dpdtfukui\_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

教職大学院 Newsletter **No.191**

2025. 2.21 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

岐阜聖徳学園大学・富山国際大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1